

三河アララギ

平成二十二年

九月号

第五十七卷 第九号



ニューヨーク日記(47) <http://blueshoe.copetin.com/>

BlueCat, Shoe Lady

May 16, 2010 : 5 Hours in Madrid

Blue Shoe Diaries



いきなりモナコに行くことにしたんだけどちょっと5時間ほど飛行機で途中下車！マドリッドでお昼ごはん！結構街をうろうろする時間があったってちょっと前から気になっていたバスク風のタパスのおみせTxakolinaにたちよってみました！ん～やっぱりおいし～ここに来る前にもグルメマーケットによってイベリコハムのサンドイッチも食べちゃった。やっぱりスペインは美味い！

Last minute travel to Monte Carlo, Monaco! But first things first. I've got to enjoy my 5 hour layover in Madrid. So off I go to town in search of some good food! Made a stop at the market and got the most simple yet most amazing jamon Iberico sandwich. Then I made my way to a Basque tapas joint that I've been wanting to go called Txakolina. It certainly did not disappoint! Had some tapas and Txakoli and was quite sad to leave Spain, the food mecca of EU so soon. I'll be back!

目次

第五十七卷第九号(通卷六八一号)

表紙カット(鮎) 今泉 由利

ニューヨーク日記(47) Blue Shoe(11)

感銘歌・御津磯夫第二歌集「ノボタンの窓より (4)

初生り 白井 久吉(七)

梅雨明け 青木 玉枝(一一)

笹百合 内藤 志げ(二三)

奈良の旅 林 伊左子(二四)

遥かなり 胃甲 節子(二七)

一緒に 清澤 範子(一九)

有限の果て 北川 宏廸(二二)

大豆 山口千恵子(二六)

和歌から派生した季語の本意(二) 佐藤 喜仙(三四)

物理学者と詩歌の世界(8) 一石(三六)

鎌田敬止という人(45) 鮫島 満(三八)

萬葉一葉(20) 今泉 忠芳(四〇)

「水魚のことから(116) 岡本八千代(四一)

ことのはスケッチ(381) 今泉 由利(四二)

和菓子街道(47) 平松 温子(四三)

お知らせ・編集後記・三河アララギ規定 (四四)

感 銘 歌

御津磯夫第二歌集「ノボタンの窓」より

魂反へりつひに來ませる君にむきて言ひがたきかもビルマ仏の寺に

P
143

ひよどりのとよもしすぐる朝冴えてみとせをへつる父よみがへる

P
144

若き心

おいてなおー おいてなおー
 わかきこころを もたまほしー
 せうのむこうは かぎりなきあすー

歌集 一本の木

杉浦 弘

若き心

作詞 杉浦 弘
作曲 杉浦 道生

老いてなお 老いてなお

若き心を

持たまほし

今日の向こうは

限りなき 明日

青桐

蒲郡 岡本八千代

お姉さまは十七回忌二人ともに川の流れのごとき歲月

われをかもこの兼松家にゆかりありてけふは来たれり臨濟宗徳源寺にざい

梅雨の間のけふのみ堂を仰ぎたり徳源寺の薨はそびえてその中

けふの日に徳源寺の薨の反り屋根の緑青にぶし鈍色にびにして

幹も葉も青桐あをき下陰を通りて遠く禅寺の門は

伽藍の下二百余畳の中にをり坊さま二十何名の読経のひびき

法要のすみたりはやも今日会ひて今か別るる青桐の下

外からは夕焼見に来よの夫の声あ草木々までもすべて赤赤

つつかけをカラコロ鳴らして歩みゆくこの音たのしわれの音かな

一枚のハガキ出さむとポストまで恰も月は十日の明かり

初生り

新城 白井久吉

水田すいでんの中干しをする五日間雨一粒もなきは珍し

國蝶の大紫の羽化といふ稀なる趣味の君を称へむ

「初生りは男が取れ」といふ言葉子どもの頃に祖母より聞きぬ

戒めを素直に聞きて昨日今日仕事に出るは午後の四時過ぎ

朝顔の棚をやうやく作り上げその出来映えをひとり賞めをり

たくましきカブトムシさへ背を下に落つればあはれただもがくのみ

豊川の浅瀬に網をめぐらして鮎あゆを捕りたることも遙かなり

初物の玉蜀黍はうまけれど多くは食へず入れ歯の今は

一本のスタチの辺り忙しげに黒き揚羽は高く低く飛ぶ

十分もあれば書きうる日記さへ滞る日の多きこのごろ

ホモ・サピエンス 東京 今 泉 由 利

残業をしてゐるやうに机に向かふ水の分子の模式図遊び

おほむねを水とタンパク質に出来てゐる私の頭で考え考え

平均といふに馴染まず生きてゐる特別気負ふことはなきまま

じゃがいもの芽がでる葉がでる花が咲く光合成のデンプン実る

光合成されゐるだろウ取り急ぎ梅雨の雨間の野菜畑

自己消化され足となる手となれるおたまじゃくしの尻尾の行く方

梅雨の雨降り止まずして豪雨なす地球の海のなりたち偲ぶ

苞も茎も葉にもびっしり棘棘あざみの花は高々と咲き

人参を千六本にきざみをり指先弾く太陽エネルギー

集団で生きのびてこしホモ・サピエンスたったひとり月を見てゐる

朝顔

豊川 伊藤八重子

灰汁^{あく}を抜き緑の露の繊維とる香りたつとふ嫁の声きこゆ

勤^{いそ}しみし老いの畑の草丈で紋白蝶の追い交ふ哀し

梅の葉より雫したたる御津山に目^ま見えて嬉し久の歌会

赤々と高きに咲き出づ凌霄花夫が指さす夏は来向ふ

濃紫^こ艶^{あで}やかに咲く朝顔に現^{うつろ}のわれの何にさびしや

咲き初めし朝顔の花の紫の高貴な色と今朝は数ふる

親切な説明受けて帰りしが我家にまさるわが場所は無い

かたばみにすみれたんぽぼ母子草雑念しづめて庭の草引く

旅行より子の帰る迄待ちませう初生りの黄瓜一つ色付く

数字好きの夫との話噛み合はず石露の葉に待ちゐし雨ふる

濃 紫

豊川 弓 谷 久 子

折あらば買ひ求めたし九十九歳の姫の詩集「くじけないで」

繰り返へし繰り返へし読む新聞にのりし姫の詩の幾編を

梅雨の中巢立ち行きしか人氣の無き軒につばめの声の聞えず

夕日かくも眩しかりしか梅雨明けぬ例年よりも三日早しと

子の振袖の地色と同じ濃紫只ひといろの庭の朝顔

新しき蟬の命の声聞かむ明けゆくを待ち庭に下り立つ

地に近く石路の葉にしつかりと未だ新しき蟬の脱け殻

わくわくと待ちかねたりき国府祭り伯母は住みゐるき国府の下町

妹の手を引き一里を駆けたりき祭囃子の音に誘はれ

遠花火の音に立ち出で道に佇つ昼のほてりの未だ残る道

梅雨明け

伊丹 青木玉枝

降りつづく梅雨空見上げ遠く見るとこまでが山どこまでも空

西の日は日課の歩みままならず短かき廊下ゆきつもどりつ

同じ道行きつもどりつもう一步明日は二歩三步前に進もう

車椅子のあなたの今日は誕生会卒寿の笑顔に拍手をします

街に出でお茶舗の席にお抹茶を一杯いただく至福のひとつとき

梅雨明けばすぐに猛暑と追って来る水木の嫩葉に強き光りを

梅雨明けの空へ広がる入道雲今日の暑さに汗がまづ先

大豪雨の梅雨もやうやく明けたれば待ちあし蝉のいつせいに啼く

長寿と言ふ集ひの席の昼食后菓を飲む人ばかりなり

生きてゆく楽しみの一つ友ありて故里くに両手で待ちあてくれる

夏至

蒲郡 杉浦恵美子

夫と我思ひ抱きて夫々に夏至の夕べを過して居りぬ

生徒等は夏至など興味ないことを思ひ知りたり今朝の朝礼

僅か五分出勤早めし朝の刻クルマも人も見知らぬ流れ

この朝はいつもと違ふ出勤路選んでみたり梅雨晴れ間にして

叱つたり呆れたること幾度か今はそれらも淡き思ひ出

この子等よいつの間にやら三年生ミニスカートの仕草も乙女

一様にさらさら髪 of 清潔感この乙女等よ我が生徒等よ

空席に座りて見れば生徒目線窓いっぱいに櫂の梢

この夏のこのアングルの景色には二度と出会へぬ暫く見入る

一学期の成績処理も済みにけり軽き疲れを覚ゆる夕暮れ

笹百合

豊川 内藤 志げ

笹群の葉丈すれすれに笹百合の一輪一輪笹山を登る

遠州と三河を結ぶその間時はざまおり小さく車の見ゆる

再びの比丘尼の岡に恋ひ来たりかの峰々は葉隠れとなる

採る度に細き蕨をわれに見すわれはひたすら坂道を行く

胸元の白きに似合ふネックレスサンゴの薄色彼女の笑顔

床の間に観音様と十三佛に羅漢様並べて掲ぐわが家の施餓鬼

若き僧の誦経のペースに付きゆけず文字を追ふのみ陀羅尼経を

細き蔓は西瓜の畑を尽したり蜂の数多が花移りする

いつもなる鳥の三羽か濡れながら玉蜀黍の残り実を食む

朝の雨玉蜀黍も穫らずして歌会に行けるうれしき雨よ

奈良の旅

岡崎 林 伊 佐 子

大仏の御像を拝む群集に帽子脱がざる外人を見き

瑠璃堂の薬師如来をちかぢかと拝みてすがし今日のえにしに

もろ人の願ひはとりどり違ひゐて御足のもとに銀貨異態^{ことさま}

參觀に長く並びて法隆寺の五重塔を妹と眺めぬ

二回目の兄弟姉妹の奈良の旅四人の夫婦も老いてすこやか

昼食は日にぬくもれるトマト挽ぎ掘っ立て小屋に弁当を食ふ

水槽にためたる水をあさあさに野菜にかけるが日課となりぬ

汗にくもる眼鏡拭きつつ刈りし草たばねる夕べ蒸れて香たつ

七月の梅雨末期大雨に被害なく育つ野菜の収穫多量

草を取る吾が身に汗は噴き出づれど朝日さしそめし畑やすけき

指おりて

豊川 安藤 和代

皮むけば黄の粒びっしりみづみづと友の心にあふるるその色
キッチンに香りいっぱい漂はせ玉蜀黍のゆで上りたり

ほのかちゃんのバアチャンがくれた玉蜀黍ママに供へていただきました

「美味しいね」「甘いね」孫は微笑みつガブリガブリと玉蜀黍食む

台風で傾きたる木傾きしまま今年も枇杷の実熟るる

歌会の明日となれば落ち着かず拭かずともよき床をみがきぬ

歌集でのお名前は知れど歌会でお会ひの出来てあふるる喜び

この御方が吾の好みの歌を詠むお人かとじっとお顔見つむる

指おりてこの日を待つは長けれど歌会の時の進む速さよ

またいつかお会ひ出来るを楽しみに思ひぬくめて帰路につきたり

風鈴

島根 金津 文枝

洞光寺に真向かふ岩倉寺屋根瓦。ピカピカ光る今日大暑なり

山よりの風に涼しく音ひとつ無き広き本堂に写経する婦人部

洞光寺の本堂に風鈴の音を聞き写経してゐる天神祭り

期日前投票をせむ梅雨晴にタクシーに乗り庁舎へ

朝より雨激しくて前日に投票済ませ安堵してゐる

ビーカーの溶液を廻す如コップのコーヒーを廻し呑む分析の癖

原料の分析教はりし主任より百才になると便りありたり

葬をすませ親族引き揚げし無人屋敷を螢は巡る

隣家の友逝き無人屋根の下鬼やんま巡り梅雨晴れの空へ

安来市との合併に戴きし梅大粒うまく煮て持ち来し嫁裕子さん

遙かなり

豊橋 胃 甲 節 子

牟呂用水の満水の水面に輪を描く魚は鮎と教へられたり
杖代りに傘を待みて歩みゆく曇り空とて自己弁護しつつ

一年を待つ日々長し盆帰省の君待ちわびしも遙かなりけり

今頃は遠き蓮田の白蓮の百余の花は清楚に咲きゐむ

花蕾の先は仄かなピンクにて咲けば純白とゆふ蓮田の清しさ

夢にさへ逢ふ事も無き八年をうから等は吾に野菜送り来

遙かなる者のみ恋ひて焦れつつ想ひばかりが駆けめぐるなり

北杜夫ドクトルマンボウ昆虫記読みつつ幾度もクスクス笑ふ

牽牛と織女の逢へぬ雨の夜を寂しみにつつ入浴してをり

いつ迄も上手に啼けぬ鶯の音を聴く度に微笑み出づる

やさしき友は

新城 半田うめ子

幼き日いじめに会ひし苦しみの吾を救ひきやさしき友は
脳病みて生きることへの欲望を失ひたりきやさしき友は

脳打ちて三本の骨折れし吾生きのびてをり幸せの日々

薬湯に入りゆきたく思ふとき温泉に行きぬ孫の親切

一人居の今日も孫の差し入れの楽しみつつ上寿司を食む

記念品吾が長男の茶器早稲田大学より送り来たりし

秋葉様防火の霊場代参の記念品なり箸を頂く

可睡^{すい}齊防火の霊場代参の秋葉様への参拝したりし

川辺にて咲きてゐるなり紫のあざみを花びんに活けて置くなり

久びさに有機肥料購ひて柿の木の根に蒔き散らすなり

一緒に

春日井 清澤 範子

休日ののんびり朝食したる時ジージー蟬の初なきを聞く

自転車にて八王子神社へ詣で来ぬ柏手打てば涼風通る

夏草を取り始むれば夫も来て一緒に成りて汗汗流す

電気店へ行けば年々新機種が並びて店員の説明を聞く

磯夫先生の錦木を読む幾度か歌の添削赤きペンにて

あべまきの大樹は新緑神社の内風のさわぎサワサワを聞く

チツチツと小鳥の声に目覚めたり最善尽そう今日の一日

胡瓜と並べ植ゑしトマトに手を足して脇芽摘みとる手匂ひけり

高蔵寺駅構内につばめの巣口をのぞかせ親鳥待ちをり

腰痛を気をつけながら畝作り胡瓜収穫神棚へ供ふ

祇園と

豊橋 伊与田広子

わが町は祇園と共に梅雨明けぬ晴れし夜空に花火上がりて

ヘンデルの王宮の花火のメロディを考へながら花火見入りぬ

連続に打上ぐ花火王宮の花火のメロディ当てはめて見る

連続に打上ぐ花火ヘンデルはよくも上手にメロディ作りし

わが家の外の温度を計りたり九時三二度正午三八度

年寄りは熱中症になり易し日中籠りて日の落ちてから

暑き中わが家の辺りひとけ人氣なき通る車の音も聞えず

埋もれたる蛇口掘り出し水遣らむわれの力にて蛇口回らず

教会は昔は男性高き声天子の声としあがめられし

女性かと思はせらるる高き声バロック調の歌見直さる

七夕

名古屋 近藤映子

七夕と短冊に書き我夫のベッド先につるして話しぬ

天の川七夕の文字我夫はジッと見るを吾見たり

どんよりの雲り日なれば天の川見えねど空を見上げてゐたり

花屋にて又も山椒の苗木鉢買ひ来て水をやりつつ一葉を摘む

網戸抜け一羽の小蠅コバエ入り来て私の顔にうるさくまとふ

久しぶりの参議員選挙して来たとゆっくり夫の耳元に話す

我夫の左手我左手を握りしめ吾の話をジッと聞くなり

W杯のサッカーボールミニレプリカを娘に頼みリビングに飾る

西の空茜色に暮れゆき夫思ひつつ水まく鉢にそよる風立つ

日傘挿しバス停に向かふ夏陽強し夫を訪ぬる嬉し一時

有限の果て

東京 北川 宏 廼

じゃあまたなと一階を押しわれの前から君は置きざり

地上よりエスカレータ下だりゆき東京の街下にあらはる

有限の果ては素数の不確定とその確かさに守られてゐる

平面なら平行でなき直線は交はるやうになつてゐるのよ

憂鬱を隠してゐても魂胆は見抜かれてゐる隠しても無駄

僕は僕の人生といふ映画にて主役ではなく観客になる

鉄パイプを握りたるまま勇氣なく離せぬままに熱奪はれてゆく

経済にも土台と柱と屋根がある消費増税屋根の話よ

パソコンのわれの画像は画素といふ細胞をもつ異次元のわれ

介護Ⅰに昇格となりレンタルの介護ベッドが母に届きぬ

鴉威し

豊川 堀川 勝子

うす暗き窟くはの中に御座します即身成仏南無遍照金剛大師さま

縋る思ひに高野の山麓登りしや苺萱道心また石童丸も

野仏の赤き前掛けしみじみと袈裟と知りたり高野の杜に

大杉の根本の窩むろに苔むして埋もれゆくかな彼方の墓標

手のひらに納まる墓標に寄りゆけば丸く苔むしその跡とどむ

朝あさに飲み干す自家製青汁に慣れ来し我がゴーヤを好む

三粒づつ蒔きたる小豆は三粒づつ緑か細き二葉兆しぬ

知らぬ間に西瓜静かに実を結び早続きの畑に勢ふ

初生りの稿王西瓜の喰ひ頃を大軽率おおそどり鳥と我のみが知る

隅々まで鴉威しのテープを張りぬそれでも鴉は西瓜を狙ふ

紫を

豊川 平松裕子

岩間より落ちくる雫の描きゐる水輪は全て二重となれり

石筍は菩薩の姿に立ちてをり太古より今に至りなほ立つ

五千年一億年二億年ただひたすらに石筍は伸ぶ

六十年の齡の我の前に立つ石筍はここに一億年を経て

目覚めたる母の忌日のその朝今年初めてのヒグラシを聞く

紫を好みし母よ今朝咲きし庭の桔梗を切りて供へる

五井山にかかれる雲の間より光は筋なし地に注ぎをり

とび去りてまた来て止まる鬼ヤンマ樹脂のアーチのその一つ場所

真昼間の小暗き部屋に帰り来て雨に濡れたる髪を乾かす

風音か雨音なるかと紛ひをり瀬音轟く今朝の谷川

非時の花

豊川 小野可南子

デデッポーデデッポッポーホーホケキヨ君が墓原の朝のしじまに
手を挙げる又会釈して行き交ひぬ常なる道の細々カーブ

正座とふ文化はすでに失せゆくか若き母達との今夜の会合

掌におさまるほどのポシエットは千尋の今日の忘れものなり

菩提樹の樹型まどかに鎮もりぬさみどりたわわ粒らつぶら実

幾年を経て野田フジは今朝を咲く細き花秀は非時ときじくの花

狭庭辺に常にあらざる羽音するフジの花穂に熊ん蜂ひとつ

ノダフジの紫やさし初花にまつはり離れず黒熊ん蜂

ギラギラの真夏のひかりの中をり日傘の影の円にかくれつつ

雨が欲し雨がほしいとひたぶるに遠遠く間遠に雷を聞く

大豆

豊川 山口千恵子

土薄く掛けつつ大豆蒔きてゐる白大豆と黒大豆とを

雨の間を見廻る畑に青々と二葉となれる大豆の五うね

梅雨の日の雨のち晴の今朝の畑茄子むらさきにトマト赤々

曇り日をよろこび畑に草をとる降り出す小雨少し耐へやう

草の中に短く蔓をのばしつつ生毛白々冬瓜らしき

二本目の蕾はさらにさらに高く伸び上がりたり甕の蓮は

丸まると蕾大きくなりてきぬくれなる色濃き甕のミニ蓮

くれなるの花弁散り落つ蓮の花命つぎゆく七粒の種

佐奈川の橋にしばし立ち止まる朝日あかあかいました出で来る

土手の草毎朝鎌に刈り並めて媼住みをり岸边の家に

東歌(三) 富士山 豊川 夏目勝弘

御殿場へ向ふ電車に雨はげし峠にゆけば富士の見ゆるや

暗黒の雲が富士を隠しゐる雷鳴を背に足柄峠へ

古里の見えずなりゆく峠ごえ前方の富士を防人いかにと

東国より強られ旅する防人ら富士より妹を子らのことども

ことさらと芭蕉の見し五月の富士黒し厚し今日の雲なり

赤人が美と見し富士を里人は常の暮しのなかなる一つ

古も今も明日も富士山は旅人のみが見たしと願ふや

富士よりの風が頭上を唸りすぐ背を丸めて峠を下る

ときに見る富士は車窓のわくのなか帰路の電車の数分にして

赤人の見し富士山も今向かふ高嶺も同じ白のかがやき

「招待」

公園

東京 秋山逸穂

琵琶の音と二鼓の音かさなる公園に月なきことをおしみつつおり
あじさいの花にポツリと落ちくれば人さわがしく歩みを速む
土の面に細かな土粒もりあげて赤味おびた蟻が出入りす
石仏の赤きまえだれあたらしく公孫樹の若葉にかこまれている
西明り秩父の山なみ黒黒とうきたたせつつやがて暮れたり

町内詠

東京 井村喬泉

就寝の前のまなこに親しみて自己啓発の本と添寝す
公園の犬と歩める人々のなかには犬に連らるるもあり
殺人のありたる森は公園と名のみ変えて人を憩はす
お隣の家が売り家になりしこと新聞折込の紙切れに知る
お隣の三台ありし自動車が二台になりぬ帰らぬは嫁か

猛暑

大阪 伊藤忠男

涼しさを求めぶらぶらあてもなく歩き続ける夜の浅草

浴衣きて団扇片手に縁台で素足ぶらぶら昔にありき

言葉では言い尽くせないこの暑さ意識薄れて幻を見る

灼熱のビル街地獄さりととても乗りきりて今日明日はいかに

ナツグミ

豊川 白井信昭

槇垣のなかに残れる一本のナツグミの実は赤さ増しゆく

山のなかヒメハルゼミの初鳴きを耳を澄まして椎の木の下

畑なかの揚水小屋にて管よりの滾たぎつる音のはるかとなりぬ

滾つ音遠くに聞こえ眠りゆく意識の底に深き水脈

私の一首

一秒に十兆個私を通過するニュートリノと今日も一日

今泉由利

太陽や星や：中心核での核融合反応によりニュートリノが発生し、光に近い程の速さで地球にも押し寄せ、通過してゆくのだそうだ。人間として、その存在を感じることも皆目ないのだけれど、ニュートリノの存在に気付く資質をもった人がいた。目にも見えず、感じることもないものが、宇宙には存在する現実を知る。出来る限りの物事の本質を知ることが、私の解釈の写生ということであり、写生の中に自身がどう存在するか、というのが私の歌の基本です。

奈良を旅せし夫書を画くわれに墨のみやげは遥かなり

金津文枝

私が習字を教はつた頃は硯に水を入れ墨で摺り筆に墨を付ける事は秘伝で特に万葉かなは濃淡が厳しく濃く書いた隣は薄く教はりました。三人の息子は大学へ希望。書店のみでは無理で朝日新聞販売店をして販売の成績良く新聞社から奈良へ招待旅行がありその時主人がお土産に。買って戴いた時の思い出を歌にしました。一人っ子の主人は皆に可愛がられセレベスの戦地から帰還歌を作り俳句と本に囲まれ優しい人がお土産に驚きました。

蕪を扱ぎて近くの姉に持ち行かむ夕陽は赤く吾が眼にまぶし

清澤範子

夫の指導にて、私がコルセットを付け、畑を耕し小蕪をまきました。肥料が行き渡り、畝が盛り上り大きくなりました。近くに姉がおりますので互に頼りにして有難く、昼間は忙しくしておりまして、会うのは夕方、私も足が不自由で足をふんばり懸命に蕪を扱ぎ、たくさんの中から良いのを選び届けた帰り道、夕陽が赤く明日も晴天、心に希望がわき上って幸せな一日でした。

帰り道ふと見上げれば桜木の蕾のつきし並木となりぬ

近藤 映子

夫の病院見舞ひの帰り道に出て来た一首。早くも丸五年余りになっている夫、救急車にて緊急入院し八回の転院をよぎなくされた。ほとんど毎日見舞ひに出掛けるのが日課の様になっている。バスの時刻表を見つつ出掛けたり帰るのだがバスはとかく遅れることが多い。その帰り道、歩道を家路に急ぎ足で向って歩いてみると、赤信号に足を止められて、あつ日が伸びたと見上げると、桜木の並木に蕾がふくらんでいる様子に気付いた瞬間の写生。

別名を田打ち桜と言ふなりを思ひ出したり辛夷を撮りたり

佐々木利幸

田打ち桜とは、広辞苑によれば、樹種は異なるが専らその他方の苗代播種の頃に咲く花を指すと書かれて居り、長野県の伊那地方では辛夷を、奈良県の吉野地方では山桜を別名として田打ち桜と言う人が多いようだ。

辛夷には、やまあららぎとこぶしはじめかみの別名もあるのだが、歌材として季節感がわかりやすい田打ち桜を取り上げてみた。今年の三月に、小戸名溪谷へ撮影に出かけた時に詠んだもので苦渋した作でもある。

無数とはかくのごときかみ社の駐車場の隅に土筆を見れば

白井久吉

三月二十一日は氏神様（摩訶戸神社^{まかこ}）のお祭り、式は午後二時からというので、家族と来客揃ってお参りに行った。駐車場はほとんど一ぱいで、隅の方にやっと入れることが出来た。自動車を降りるとすぐに目に入ったのが、これまで見たことのない見事な土筆の群生である。その時の驚きの一首である。

歌はきわめて平凡、採るに足らない作品であろう。だが、初句・二句で土筆が沢山出ている驚きを表すことが出来たと思う。

『いとうよせ』

「俳句」

ひとり居の父の写メール甲虫

植村公女

沈黙の真中よぎりし梅雨時雨

炎天や砂上わたしと鳥の影

これもまあ一つの生命いのち生山葵

一石

カルガモの子育て終わり人も去る

朝顔や互いに絡み振り合ひ

白灯や秋暑しゅうしょの船にコンテナー

佐藤喜仙

身しに入しむや京きやうに小雨こいうの寺巡しり

こぼれ萩掃はぎき寄せ見れば色失しせず

可憐これんさに屈まみ見みている花はないかだ

皓一

エアコンの音ねばかりなり日盛ひや

夏の川救助きゆうすけへりから朱しゆロープ

和歌から派生した季語の本意（その二）

「笹」同人 佐藤喜仙

3 身にしに入む

平安朝中期以降「もの あはれ」が秋の情趣の表出として認知されだした中で、「身に入む風・秋・色・暮」等として用いられ、秋の「ものあはれ」を強調する季語として定着した。

「秋ふくはいかなる色の風なれば身にしむばかりあはれなるらん」

和泉式部（詞花集）

「夕されば野べの秋風身にしみて鶉鳴くなり深草の里」

俊成（千載集）

例句

身にしむや亡妻の櫛を閨に踏む

蕪村

戸障子の古く身にしむ海の宿

魚目

身に入むや林の奥に日当りて

眸

4 萩

「吾が待ちし秋は来りぬ然れども萩が花ぞいまだ咲かずける」

詠人しらず（万葉集）

山野に生ずる灌木で、山上憶良が秋の七草の筆頭に挙げたように、万葉時代から親しまれていた。特に萩と鹿との取合せは日本人の情緒を刺激したと見え古来から詠まれた。

「宇陀の野の秋萩しのぎ鳴く鹿も妻に恋ふらく我にはまさじ」

丹比真人（万葉集）

「秋萩の花咲きにけり高砂の尾上の鹿は今や鳴くらむ」

藤原敏行（古今集）

例句

こぼるゝにつけてわりなし萩の露

鬼貫

行き行きてたふれ臥とも萩の原

曾良

萩の風何か急かるゝ何ならむ

秋櫻子

あらあらと帯のあとや萩の門

みどり女

5 新涼（秋涼し・秋涼）

俳句では「涼し」と言えは夏の季語である。

夏は最も涼しさが願わしい季節だからで、樹影やそよ風や滝の音等に日本人の感受性は涼味を感じ取ったのである。

「秋来ぬと思ひもあへぬ朝けよりはじめて涼しせみのはごろも」

花園院（新拾遺集）

新涼は「涼し」に対し秋になってから立つ涼気を言う。前記の様な歌も存在するが、「新涼」が秋の季語として確立したのは連歌以降である。

例句

秋涼し松にかかりて天の川

蓼太

新涼や紫苑をしのぐ草の文

久女

新涼や尾にも塩ふる焼肴

真砂女

贈呈誌 七月号

「秋田アララギ」

金田 礼子

「柵」

山本 正雄

雪融けて鉢々を元の位置に置くドイツ鈴蘭の新芽を見つつ

鳥の声聞かぬ静かな足羽川菜の花遙か右岸も左岸も

「愛媛アララギ」

徳本タエ子

「群山」

相澤 寿美子

桐の花さく山裾のテニスコート激しく打ち合ふ音こだまする

しづかなる春の夕べを降る雪はポストの上にわづか積もれる

「鹿児島アララギ」

上原 泉

「榎の木」

朝比奈とよ子

降灰の忽ち積りし駐車場に猫の横ぎりし足跡残る

川原に差しくる光は春さなか今朝砂利トラック一台も見ず

「高知アララギ」

岡村 和栄

「穂の原」

松井 花子

やうやくに下ると覚え息をつく藪の暗きにシヤガの花群

眠りある嬰兒抱かせくるる母吾がとりあげし歩あゆちゃんなりし

「滋賀アララギ」

伊谷 昌子

中井 美恵子

音もなく揺れる若葉に日の射して高き樺は輝きてをり

庭隅に育む桔梗の咲き初めり家紋は桔梗と夫の一言

「冬雷」

酒向 陸江

田中 浄子

大木の下に揺らげるマムシ草くだりの道に五つ見つける

敷藁を終へたし今日のこの晴間西瓜南瓜の手入れに暮るる

「灯」

横井 弥栄

鈴木 せつ

刈り残る枯草の間に若葦は確かな緑光らせており

夏空の青を見上げり飛行機が戦争中を思ひ浮かべり

物理学者と詩歌の世界(8)

一石

アルベルト・アインシュタイン(1879-1955)はドイツ生まれのユダヤ人理論物理学者である。チューリッヒ工科大学を卒業、スイス特許局員を経てベルリン大学、プリンストン高級研究所などの教授を歴任。

特殊相対論および一般相対論、ブラウン運動の理論、光子仮説、ボーア-アインシュタイン統計など、物理学の全領域にわたり多くの業績をあげ、「現代物理学の父」と呼ばれる。機知に富んだ言動や人柄、平和主義者としても人々に敬愛された。

20世紀における物理学史上の2大革命として相対論および量子力学が挙げられるが、アインシュタインはそのいずれの誕生にも深く関わった。1905年光速度の不変性と「相対性原理」をもとに、時間や空間の概念も含め従来の物理学の体系を根本から再構成した特殊相対論を発表。1907年、箱の中の観測者は、自らにかかる力が慣性力なのか重力なのか区別ができないという、後の一般相対論の基礎となるアイディア(等価原理、生涯最良の名案)を思いつく。特殊相対論は重力のない状態での慣性系を取り扱った理論であるが、1916

年には加速度運動と重力を取り込んで拡張した一般相対論を構築した。1919年、皆既日食において一般相対論の予言どおりに太陽の重力場で光が曲げられること(重力レンズ効果)がエディントンの観測により確認された。理論の基礎をなすアインシュタインの重力場方程式は宇宙の誕生や進化・構造の解明(宇宙論)にかかせない役割を果たしている。さらに後半生の30年近くを重力と電磁気力を統合する統一場理論を構築しようと心血を注いだが未完に終わっている。

量子論とはやや屈折していたかわりをもった。当時の物理学では説明が困難であった光電効果を、光子仮説によりみごとに説明するなど、初期量子論の確立に多大な貢献をした。しかしその後完成された量子力学自体については解釈をめぐって主流派のボーアとアインシュタインの間に長年にわたって論争が行われた。ボーアの確率的な解釈に対しては懐疑的な立場を取った。反論の一つとして1935年「アインシュタイン-ポドルスキー-ローゼンのパラドックス」を提示した(後に「量子テレポーション」として量子通信などの基礎として注目)。

1939年、当時ナチドイツによる原爆開発の可能性があったことからレオ・シラードの勧めにより大統領フランクリン・ルーズベルト宛への原子力とその軍事利用の可能性に触れた手紙に署名した。アイ

ンシュタインは原爆開発に直接かわかることはなかった。1955年、哲学者バートランド・ラッセルとともに核兵器の廃絶や戦争の根絶、科学技術の平和利用などを世界各国に訴える内容のラッセルⅡアインシュタイン宣言に署名し、それが契機となつて後にバグウォッツシュ会議が創設された。また世界連邦の樹立を提唱するなど、多くの平和的言動を残した。

1922年、石原純（参考資料1）などの招きで訪日した。日本へ向かう途中ノーベル物理学賞の授賞の知らせを受けている。物理学者としての業績は特殊相対論と一般相対論が有名だが、授賞理由は政治的な理由により「光量子仮説に基づく光電効果の理論」であった。

アインシュタインは、二十歳のころ傾倒する哲学者スピノザを賞賛する詩を残している。それ以外の詩については筆者には不明である。しかし多くの深い思索に基づく含蓄ある言葉や警句を残している（参考資料2）。それらは詩的ではある。むしろアインシュタインという人物そのものが至高の芸術作品であり詩人であったといえよう。以下にアインシュタインの言葉をいくつかを紹介する。

○人間の邪悪な心を変えるよりはプルトニウムの性質を変える方がやさしい。

○我々という言葉に疑問を感じる。誰も隣の人間と同じではない。

○知性は方法や手段に対して鋭い鑑識眼を持つているが、目的や価値に対して盲目である。

○空想は知識よりも重要である。知識には限界があるが、空想は世界すら包み込む。

○生きるには二つの方法しかない。何事も奇跡ではないかのように生きるか、あらゆることが奇跡であるかのように生きるかだ。

○学校で学んだことを一切忘れてしまったときになお残っているもの、それこそ教育だ。

○常識とは十八歳までに身につけた偏見のコレクションのことをいう。

参考資料

1) 三河アララギ、平成22年2月号、第55巻、P 36

2) 『アインシュタイン選集3、アインシュタインとその思想（湯川

秀樹監修）、共立出版

鎌田敬止という人（四十五）

「月虹」 鮫島 満

青磁社時代

〈高村光太郎との交流（7）〉

この手紙には、光太郎の承諾なしで光太郎の歌集を出したり、光太郎の与り知らぬ出版社と交渉したりいて迷惑な存在であった宮崎を牽制する狙いもあるように思える。それはそれとして、この手紙には鎌田に寄せる信頼の厚さが表れている。右に「璞書房」とあるのは、鎌田が青磁社から独立して設立しようとした社名で、鎌田は十月頃からこの出版社の設立を考えていて、光太郎宛の手紙にも、

先づ「天上の炎」を璞書房第一出版に致したく筆写の出来次第組版に廻すことにします。（略）来年操業の暁は、先生の御本を矢継ぎ早やにもりもり出して行くつもりです。

（昭和二十一年十二月二十三日付）

とある。

ところで、光太郎から言い始めた『花と実』はどのような事情からか、その製作が遅れ始める。光太郎自身、「花と実」はスケッチを沢山入れることにしてこれはゆつくりいい本に作りたいと思ひます。小

生も岩手へ来てはじめての詩集ですから力を入れたいと思ひます。」（鎌田宛、昭和二十一年十二月三十日付書簡）と言ひ始めるのである。どうやらこの遅れの原因は光太郎の同詩集の印刷・製本上の出来ばえへのこだわりであったようで、「花と実」その後どうなりましたでせう、図版ももう相当にいけますからそろそろおまとめ下さいませんでせうか」（昭和二十三年二月二十日付）と催促する鎌田に、「花と実」は今年のものになるかと思ひますが『至上律』誌上の印刷では随分ひどい成績でしたが、果して印刷が出来るものでせうか。せめて鉛筆単色でも、その感じが印刷で出ればいいのですが。」（昭和二十三年二月二十一日付）と手紙を書いている。光太郎には、スケッチをたくさん入れることもあり、印刷・製本技術の好転を待とうとする気持ちがあるようである。それは、

「花と実」「猛獣篇」はデッサンの印刷が相当よく出来るやうになつてからにしたいと思ひます。例へば鉛筆で描いたデッサンの印刷を見て鉛筆がHBか何Bかが分る程度になつてからにしたいです。月頃御訪問あるやうなおてがみですが汽車の事情はますます悪いやうにききますし、御健康にさはるやうな事があつてはいけませんから御無理なさらぬやうに願ひます。

（昭和二十三年四月十一日付）

にも明らかである。光太郎は明らかに『花と実』の出版を引き延ばそ

うとしている。鎌田はこの後にも『花と実』の原稿を催促している。

『花と実』も年内に原稿おまとめ願へたらと思ひます。秋に参上できましたら其折万事お打ち合せいたしたう存じます。」(昭和二十三年七月二十九日付)、「白玉書房の刊行書も本当の初版ものが割合に少くてもや新鮮味を欠いてゐると思ひますが、その意味からでも猛獣篇や花と実などは一日も早く出版できたらと念じてゐます」(昭和二十四年一月二十四日付)、「こんどお目にかかる時には(略)花と実などいろいろ具体的にお願ひいたしたいと思ひ大変楽しみです。」(昭和二十四年三月十七日付)、「図版の製版印刷技術も大変よくなりましたから、花と実も是非いただきたう存じます」(昭和二十四年十二月一日付)などといった鎌田の熱意は通ぜずついに未刊に終わったのであった。思えば、光太郎が昭和二十年五月疎開直後から書き始め、空襲で焼失した後も書き直すなど相当に力を注いだものでありながらこうなったのは、光太郎のこだわりのためであるとは言え、鎌田にとつては残念なことであつたらう。

光太郎が花巻町に疎開して間もなく鎌田が企画し、光太郎も積極的姿勢を示した「宮沢賢治選集」は、鎌田がどういういきさつで手を退いたか不明だが、智恵子の姪の夫である宮崎の手引きで日本読書組合から出され、光太郎の不快を買つた。宮崎は昭和二十三年には光太郎の歌集『白斧』を光太郎に無断で出版した。これを光太郎から知らされた鎌田は、『白斧』のこと実に驚きました。御迷惑お察し致します。私などには想像もつかない遣口のやうですが、若し私がそんな事を仕

出来しましたら、著者のお叱りを受ける前に私の家庭は破滅です。夫婦別れになりませう」(昭和二十三年二月二十日付)と書き送っている。右の環書房について確認しておきたい。鎌田は昭和二十一年十月にはすでに環書房を創立する計画を立てていた。それは、山形県大石田に疎開中の斎藤茂吉の日記に、

午前中鎌田敬止君ト談合、環(あらたま)書房ト云フノヲ創立ノヨシニテ予ノ短歌初学門ヲ出シタイト云フ希望ソノ他(十月二十八日)

とあることによつてわかる。このほか茂吉は鎌田から年末には出来上がる『文学直路』再版本の検印についても説明を受けたと思われる。このあと鎌田は、かななか進まない詩集「花と実」について交渉するために花巻に光太郎を訪ねることになっていた。茂吉は十月三十日の日記に「鎌田君一番ニテタツ、高村光太郎氏ニ寄ル筈デアツタ」と記している。この十月の時点で鎌田はまだ光太郎には環書房の話してはなかつたかもしれない。後にこの社名は、光太郎の「環書房はカナをふらないと今の人には読めないでせう」(昭和二十一年十二月三十日付書簡)という意見やその他周囲の意見によつて結果的に「白玉書房」になった。なお、この社名については光太郎から「白玉書房は大変美しいと思ひます。」(昭和二十二年四月十一日付書簡)という感想が届いている。

萬葉一葉 (320)

今泉忠芳

磐姫その二十二 山多都祢・山多豆乃

磐姫皇后思天皇御作歌四首

君之行 氣長成奴 山多都祢 迎加將行 待尔可將待 (85)

右一首歌、山上憶良臣類聚歌林載焉。

古事記曰、輕太子奸輕太郎女。故其太子流於伊予湯也。比時、衣通王、

不堪恋慕而追 往時歌曰

君之行 氣長久成奴 山多豆乃 迎乎將往 待尔者不待 (90)

この二つの歌についてみると、この歌は伝承されてきたことが示唆される。

歌の表記以前

柿本朝臣人麿が「歌」を漢字を用いて表記することを始めて行った。歌はそれまでは文字によって表記されることはなかった。歌は口承による伝承によって伝えられてきた。

柿本朝臣人麿が歌を漢字を用いて表記することを始めたのは中大兄皇子時代(662〜667)と思われる。それ以後、歌が表記されるようになったと考える。人麿以前は日本語を表記することがなかった。表記は漢文が用いられていた。歌は漢文では表記することができないのである。

口承による伝承

磐姫皇后の「御作歌」(85)の作歌推定年を340頃(四世紀半ば)

とする。仁徳天皇陵(大山古墳)の成立年代から概算した年である(仁徳天皇313〜399)。

この「御作歌」が山上憶良の類聚歌林に記載されたのは元正天皇龜元年(715)と推定される。従って三百七十五年の間「御作歌」が口承され伝承されてきたことになる。この伝承を山上憶良が表記したのである。

口承による伝承は一人から一人に限られることなく、多くの人に伝承され、人々が皆この歌を知っていたと思われる。伝承は特異的な存在ではなく、広く共有されていたということである。文化の共有である。古事記においても、稗田阿礼が口承により受け継いだ伝承が文字になったものである。

口承による異伝の発生

口承による伝承には些細な変化を生ずることがある。この例が磐姫皇后の「御作歌」(85)が衣通王の歌(90)の異伝となったと考える。磐姫皇后の「御作歌」が三百七十五年の間伝承されているうちに変化して、衣通王の歌という異伝を生じた。

山多都祢(85) 山多豆乃(90)

迎加將行(85) 迎乎將往(90)

待尔可將行(85) 待尔者不待(90)

磐姫の「御作歌」(85)は逡巡の歌である。

衣通王の歌(90)は意志の歌となっている。

古事記・允恭天皇紀に、木梨の輕皇子と衣通姫の物語がある。伊予に流された輕皇子を衣通姫が追って行ったと記されている。古事記では(90)がこの物語の中にもみられる。伝承のうちに磐姫皇后の「御作歌」が、衣通姫の物語に混線したものとと思われる。

「氷魚」のことから (116) 岡本八千代

梅雨が明けて、もう三・四日晴天がつづく。暑くても、晴れた夏空は子供の頃から私は好きだった。

この間まで興奮した、サッカーのW杯南アフリカ大会。日本勢選手のPK戦での惜敗の抒情。テレビよりしか見聞きしないあのブブゼラの音。…………。

一方、「はやぶさ」という日本の小惑星探査機が七年ぶりに帰ったこと。そのカプセルに砂が入っているか、どうか?とか。

そして、今また2014年夏には、水星探査機なるもの(熱対策研究)が完成されるらしい。

科学の力によって不思議が解けてゆくような不可思議。しかし、そこには人間の心を動かす何かがあつてこそと思う。そんなことを思いつつ、子規の文学する心を探つてゆく。

最近読んだ碧梧桐著の「子規を語る」には、

「小生露伴を訪ふ事二度なり、数日前拙著月の都を袖にして同氏を訪ふ、生曰く僕拙著一卷あり、友人皆出版を勧む僕之に応ぜんと欲す、而して拙著中の趣向君の著述中より儷^{ゆず}み来る者多し故に一応君の承諾を経且批評を乞ふ云々、……以下略」

と。その時、露伴に客があつて、子規は、自分の小説について語れなかった。翌日、露伴は使を以つて、子規の小説に一書を添えて返した。

一書について「多少の評あり、然れども尽さず……」と子規は言っている。故にまた露伴を訪ねたのであつた。露伴が小説について、何というのかを聞きたい熱意がここにもあつた。

ところが、露伴からは、小説のことより、むしろ、俳句の方について、対等に話しができて、語ることができた。子規は露伴訪問の結果、「その期待を抛擲^{ほうてき} (なげだす) せねばならなくなった、その当座の表情は恐らく毒を飲むようであつたであろう。」と碧は書いています。

さらに碧は、子規が小説を世に問う気持ちに断念してゆく心の状態を、
「煮えくりかえるような腹の中の懊悩を、強て自制した冷やかな言葉であつた。しかしながら、軽率な一時の欲望に駆られて、窮極の自己の価値を暴露すまいとする聡明な判断にも立脚していた。子規の他に対してよりも、自己に対して辛辣な批難攻撃を辞せない、客観的裁断の力強さをも物語っているのであつた。子規が惻巧であるよりも、對自己關係に嚴肅である操守(節操)のためであつた。」
とも書いている。

かくして、子規は「月の都」出版をいったん諦めたのであつたが、その後約二年間は、心に深く蔵されていたのに、彼のジャーナリストとして携わっていた「小日本」について発表したものであつた。

時は明治27年2月「小日本」創刊号より「月の都」掲載。彼は、編集主任となつた。

ことのはスケッチ (381) 今泉由利

『水』

物心ついて以来、不思議をいっぱい抱え込んでいた。「水」も不思議、不思議の困った存在だった。

思いついて出掛けたアルゼンチンと、父母の日本とを五十回か六十回か往復した。

地球の丸さを見ながらの飛行、ずっと太平洋、大西洋、その大きな水の広がりを見つづけていたのだった。

イグワスの滝の周辺の水に近寄り、その大量だったこと。アマゾン河、ラ・プラタ河：むこう岸の見えない大きな河も、水は流れ、流れ続けて終りはしない。

幼かった頃の、ザリガニ捕りや、うなぎを掴まえた沼や池や小川。植物への水やり。井戸から汲んだ水。水道の水。飲む水。食べる水。人間の身体の70%は水といわれる。

水の分子記号の「H₂O」がどんな状態になっていて、目に見える水になるのか。

化学者ではないから「知りたい」などとは、おこがましいことかもしれないが。

このごろ「水」を調べていたら解ってきたような、解らないような。水分子は、酸素原子1個と水素原子2個と結合している。

酸素原子は、マイナスの電気を帯び、水素原子は、プラスの電気を

帯びる。ひとつの水分子のなかにマイナス電気を帯びた部分とプラス電気を帯びた部分ができるということで、この『極性』により、水分子の水素は他の水分子の酸素と緩やかに結びつく。

このことを『水素結合』といい、1個の水分子は、周囲の4個の水分子と水素結合により、籠状に結合する。

水を加熱すると熱エネルギーによって、水分子は動き回ろうとするが、水素結合により、自由に動き回れないから、沸点が高くなる。

水が凍ると、水素結合により水分子が規則正しく並び、空洞が増え、体積を増す。

水が液体から気体になる温度も高く、従って蒸発しにくく、水素結合により水は安定した性質をもっている物質であることを理解した。

水は、ほとんどの物質を溶かし、水中に拡散させ、片寄ることなくゆき渡る。

原子地球は、チリや天体の巨大衝突後、内部も表面も全体は、どろどろに溶け、重い鉄が中心へと沈んでゆき、核が形成され、二酸化炭素や水などがガス化して、地球を覆う大気をつくった。

地球が少し冷えると、大気の中の水蒸気が雨と降り注ぎ、地球の表面は、さらに冷え、岩石、地殻が出来、降り注いだ雨が溜って海ができた。

海の中の、熱水噴出孔から吹き出した地球を形成する物質は、かたよることなく拡散し、生命がはじまるのに必要な化学反応を起こしたにちがいない。

水という水の性質のゆえに、地球上に生命がはじまるに至ったことを肯う。

和菓子街道 (47)

<http://www.trad-sweets.com/>

平松温子

赤坂宿と次なる藤川宿との間の本宿にある法蔵寺門前には、その昔、「法蔵寺団子」なる名物があった。扁平にへこませた大きめの団子5つを竹串に刺し、火で炙ってたまり醤油で味をつけたもので、味も香りも絶品と大評判だったそう。しかし、街道が衰退したため、昭和初期には途絶えてしまったようだ。

この団子のことを調べているうちに、亡くなった祖父のことを思い出した。生前、祖父はよく、醤油で焼いただけの団子を食べたがった。餅に醤油をつけたものならどこにでもあるが、団子を醤油で焼いただけというものは案外見かけないものだ。

御油で生れ育った祖父は、子供の頃、本宿辺りまで徒歩で出かけたらしい。もしかしたら祖父が懐かしがっていたのは、法蔵寺



団子ではなかったか。

今では祖父に法蔵寺団子を知っているか訊くこともできないが、きっとそうに違いないと勝手に決めている。

お知らせ

▽編集会は、九月十二日(第二日曜日)に発行所にて行う。

▽十月号原稿は、九月一日(水)までに、必着、郵送のこと。

※毎月の原稿が、期日までに到着しないと、編集に支障をきたします。

郵便の休配(日曜、祝日)を考えあわせて早目に送付してください。

※掲載ずみの原稿は、毎月の三河アララギ誌と共に返送しますので、返信用封筒は不要です。

歌稿の送り先

東京都北区王子本町一の二六の六A
〒一一四・〇〇二二 今泉由利

※原稿用紙は、二百字詰め(20字×10行)を使用し、文字はわかりやすく楷書で濃く大きく書いて下さい。

編集後記

△八月八日・三河アララギ、九月号の編集会(このところ猛暑日という単語が、テレビ・新聞・ラジオに溢れています。

緑の木々に囲まれた編集室は蝉の合唱コンサートさながら……編集部員はこの暑さの中、編集作業に没頭、歌稿・原稿が手際よく部員の間を渡つていく。初歩的なこととして作者の思いがこもつた単語が正しく歌として認められるだろうか、又難解な単語・地名等にルビをどうしたものか、……夫々完璧を目指しての作業です。

△ここ二、三ヶ月、三河アララギにとつては大きなイベントが続きました。蒲郡市民会館に於て御津磯夫先生の生前の短歌・紀行等の足跡の展示・そして先生亡き後の三河アララギ誌が一号の欠刊もなく六八〇号刊行していること等の紹介された企画展……。

六月には会員、購読会員が一堂に会しての御津山吟行歌会が大恩寺山「呑籠」に於いて、開催されました。

いずれも感慨ぶかく有意義に盛況裏に終えることができました。

これからも、御津磯夫先生から続く「写生」を第一として短歌にとりこんでいきたいと思っています。

(小野)

三河アララギ規定

◇「三河アララギ」に短歌を寄稿する者は、「三河アララギ」会員であることを必要とする。

◇規定の会費を送金すれば、すぐに会員になることができる。

◇会員には毎月歌誌「三河アララギ」を送付する。

◇会費は、平成十年一月日より、半ヶ年分二万円、一ヶ年分三万円の割で前納された。ただし、購読会員は、半ヶ年分二千元、一ヶ年分四千元とする。

◇会員は、住所変更の際は、すみやかに通知せられたい。退会の際も同様ただちに連絡せられたい。なお、退会の際の既納会費は、返戻しない。

◇会員は、発行所開催の諸会合に自由に出席することができる。

◇会員は、短歌・その他論文・随筆等を送稿することができる。毎月一回一日締切り厳守。なお原稿は一切返却しない。ただし返送希望者は返信封筒の同封があればお返しします。

平成二十二年八月二十五日印刷 第五十七巻 第九号

平成二十二年九月一日発行 定価 六百元

編集部

岡本 八千代・小野可南子・夏目勝弘

平松 裕子・山口千恵子

発行人

今泉由利

発行所

三河アララギ会

URL

三河アララギ発行所 〒四四二・〇三二一

印刷所

豊川市御津町御馬西三七

TEL

(〇五三三)七五・二〇〇九

振替口座

〇〇八三〇・六・五六三二九

E-mail

yuri88@cronos.ocn.ne.jp/

Homepage

http://maizumiyuri.jp/

株式会社 桜創美